

「愚かな物好きの話」(セルバンテス)

フィレンツェの町にアンセルモとロターリオといふ、同じ年で裕福で、深く信頼し合ふ二人の獨身者がゐるが、アンセルモが名家の美しい令嬢カミーラに惚込んで結婚した後も、二人の友情は少しも損なはれる事が無かつた。處が、或日、アンセルモが友に内心の苦惱を打明けてかう語つた。どう見ても幸福な僕なのに、「およそ奇妙な、常軌を逸した願望」に取憑かれ、我乍ら呆れ果て、それを拂ひのけようと必死になつてゐるがどうにもならない。驚くロターリオにアンセルモは云ふ、實は妻が眞に「善良で貞節な女かどうか」が氣になつてならず、「どれほどの誘惑に耐へ得る」女かを確かめる爲の試練を課して、妻がそれに耐へ抜いた時に初めて「僕は自分の幸せを比類ないもの」と信じられる事になるのだ、そこで、君だからこそ頼む、妻を誘惑してみては貰へまいか。

ロターリオは憤慨して、「神の御心にそむくやうなことに友情を用ゐてはならぬとて、友

の愚劣を諫め翻心を迫るが、アンセルモは己が「病氣」を治すには「奇策」に訴へるしかないとして譲らず、己む無くロターリオは親友の頼みを受入れる。が、カミーラは頗る志操堅固な女だつたし、ロターリオも當初は本氣で誘惑する積りなど毛頭無かつた。然るに、すつたもんだの末、何時しか二人は「人間の情慾に打ち勝つ」事が出来なくなつて、相思相愛の仲になつて仕舞ふ。

かくて「裏切り者の友」となつたロターリオは細君には何の懸念も無いとアンセルモに告げ、「愚かな夫」はすつかり満足して心安らかに日を送る。が、事情を知つたカミーラの侍女レオネーラが女主人のふしだらを良い事に自分も男を邸内に連込み、それが一因となつてカミーラとロターリオの関係が露見しさうになつた爲、カミーラは夫を欺くべく迫眞の「いかさま芝居」を演じ、アンセルモはこの世で最も體よく騙された男とは成り果てた。

處が、やがてレオネーラは密會の現場をアンセルモに押へられ、短劍で威嚇されて、許してくれたら「重大なことを打ち明ける」と約束する。それを知つたカミーラは侍女が一切を白狀する積りだと思込み、寶石を持出して逃走する。アンセルモは漸く己が不幸と愚昧とを悟り、憔悴して死ぬ。ロターリオはナポリに走つて軍隊に入り、スペイン軍と戦つて死ぬ。それを知

つてカミーラは尼になるが、程無く悲嘆の裡に死ぬ。

「ドン・キホーテ」に本筋とは無關係に挿入された話だが、騎士道の理想の復活なる見果てぬ夢を懷いて現實に敗れ去る、「愚かな物好き」の權化ごんげドン・キホーテを創造した如何にもセルバンテスらしい作品である。アンセルモはこんな手紙を遺して死んだ。僕は「妻を赦ゆるしてゐる」とカミーラには傳つたへてほしい、「彼女に奇蹟を行なふ義務はなく」、僕が「彼女にそれを強要できるはずも」なかつたのだ。いかにも、人間誰しも「奇蹟を行なふ義務はな」いし、それを他者に「強要できる」人間も存在しない。アンセルモは神ならぬ身の人間に奇蹟を求め、求められた方は如何にも神ならぬ身の人間らしく振舞つた。そして、神にしか許されぬ不遜ふそんの代價かは死であつた。ナサニエル・ホーソンの有名な短篇「瘧あせ」の主題もそれである。然るに、一八九五年、「代表的アメリカ人」の一人と稱へられるO・W・ホームズ・ジュニア米最高裁判事はボストンでの講演會の席上、かう云ひ放つた、「一體、誰に耐へられようか、名譽といふ愚かしくも崇高な觀念の存在せぬ世界、可能性の限界を超える認識を我物にせんとの無分別極まる情熱の存在せぬ世界、達成不可能こそが正しくその本質をなす眞の理想の存在せぬ世界、そんな世界に一體誰が」。世界に冠たるドン・キホーテ國家アメリカの魂の正に端的な表

現である。

(牛島信明編譯、「セルバンテス短篇集」、岩波文庫)